

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 75 (5) は, Regular Article が 3 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Regular Article

Association between the serum insulin-like growth factor-1 concentration in the first trimester of pregnancy and postpartum depression

S. Adachi*, N. Tokuda, Y. Kobayashi, H. Tanaka, H. Sawai, H. Shibahara, Y. Takeshima, M. Shima and the Japan Environment and Children's Study Group

*1. Hyogo Regional Center for the Japan Environment and Children's Study, Hyogo College of Medicine, Nishinomiya, 2. Department of Public Health, Hyogo College of Medicine, Nishinomiya, Japan

妊娠第 1 三半期における血清インスリン様成長因子-1 濃度と産後うつとの関連

【目的】 うつ病の患者は, 血清インスリン様成長因子-1 (insulin-like growth factor-1: IGF-1) 濃度が高い。しかし, 血清 IGF-1 濃度とうつ病の発症との縦断的な関係は明らかではない。本研究は, 日本の「子どもの環境と健康に関する全国調査 (Japan Environment and Children's Study: JECS)」で得られたデータを用いて, 妊娠第 1 三半期における血清 IGF-1 濃度と産後のうつ発症との縦断的な関連を明らかにすることを目的とした。【方法】 JECS には 97,415 名の妊婦が参加し, この研究ではそのうち 8,791 名が登録された。妊娠第 1 三半期におけるうつ状態, 出産後 1 ヶ月の産後うつの発症, およびその他の共変量

に関するデータは, 自己記入式質問票への回答によって収集した。妊娠第 1 三半期に血清 IGF-1 濃度を測定した。参加者を血清 IGF-1 濃度により 4 群に分けて比較した。【結果】 妊娠第 1 三半期には, 血清 IGF-1 濃度は妊婦の心理的不安との有意な関連はなかった。しかし, 縦断的解析では, 妊娠第 1 三半期の血清 IGF-1 濃度が最高四分位群の母親における産後うつの発症は, 最低四分位群の母親よりも有意に低かった (オッズ比 0.48, 95% 信頼区間 0.30~0.79)。【結論】 妊娠第 1 三半期に血清 IGF-1 濃度が高い妊婦は, 低濃度の妊婦よりも産後うつを発症する割合が低かった。妊娠中の血清 IGF-1 濃度が高いことは, 産後うつの発症を予防するのに有効な可能性がある。

Regular Article

TEMPS-A (short version) plays a supplementary role in the differential diagnosis between major depressive disorder and bipolar disorder

C. Morishita*, R. Kameyama, H. Toda, J. Masuya, Y. Fujimura, S. Higashi, I. Kusumi and T. Inoue

*1. Department of Psychiatry, Tokyo Medical University, Tokyo, 2. Department of Psychiatry, Maezawa Hospital, Ashikaga, Japan

大うつ病性障害と双極性障害の鑑別診断における TEMPS-A (短縮版) の補助的役割

【目的】 大うつ病性障害と双極性障害の鑑別診断を早期に達成し, 適切な治療を行うことは非常に重要である。昨今, 気分障害の診断に対しての感情気質の関連性への関心が高まっている。そこで, われわれは, Temperament Evaluation of Memphis, Pisa, Paris and San Diego-autoquestionnaire version (TEMPS-

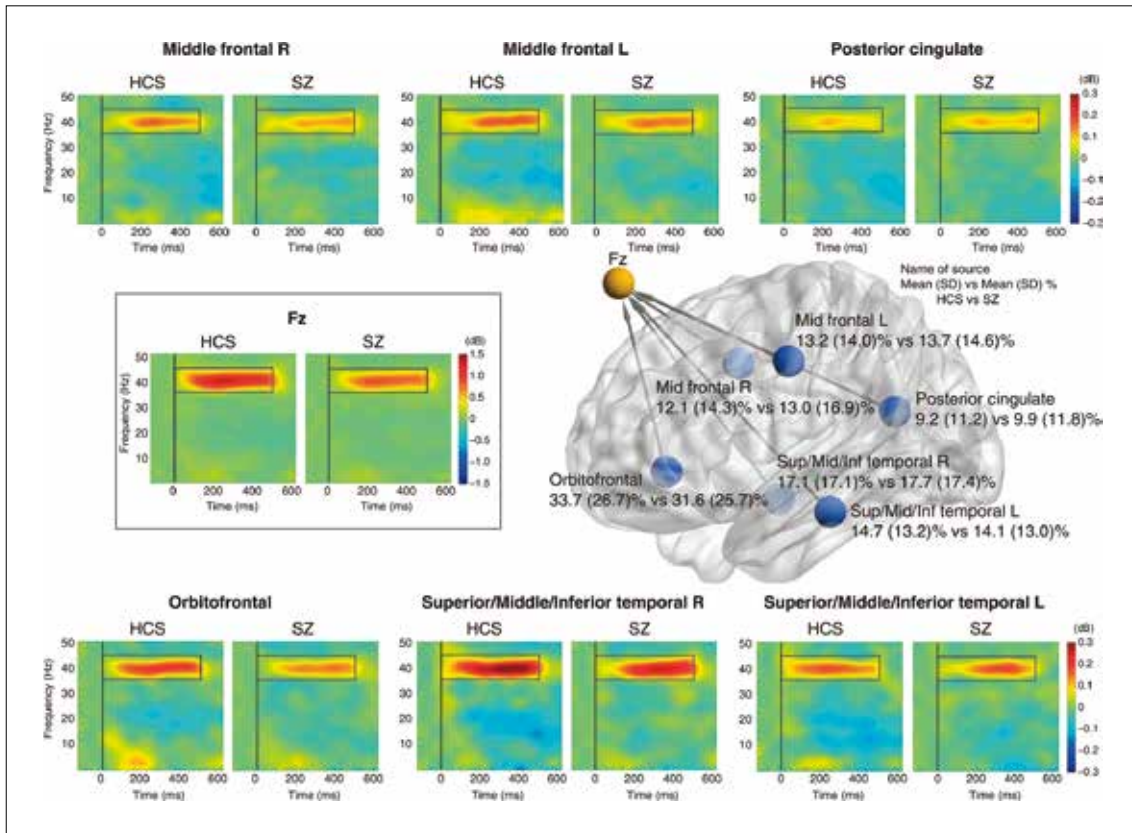


Fig. 1 Contributions of source components to gamma-band auditory steady-state response at scalp Fz. HCS, healthy comparison subjects ; Inf, inferior ; L, left ; Mid, middle ; R, right ; Sup, superior ; SZ, schizophrenia patients.

(出典：同論文， p.174)

A) 短縮版を用いて、気分障害患者の感情気質を評価し、診断における妥当性を検討することとした。【方法】対象は146名の双極性障害患者、および128名の双極性障害の入院患者とした。TEMPS-A短縮版に回答し、さらに、うつ症状および躁症状の重症度が評価された。単変量解析および多変量解析を実施し、双極性障害患者群と双極性障害患者群のデータを比較した。【結果】感情気質の5つの亜型のなかで、発揚気質、焦燥気質、循環気質の点数は、双極性障害患者群よりも、双極性障害患者群で有意に高かった。うつ症状と躁症状の重症度および5つの感情気質の亜型の点数を説明変数とした多変量ロジスティック回帰モデルにおいては、2つの感情気質の亜型（循環気質と不安気質）が双極性障害の診断と有意に関連していた。双極性障害を双極性障害と鑑別するカットオフ値の検討も行い、循環気質の評価に用いられる12項目のうち、8項目以上に該当する場合であると決定した（感度：35.9%，特異度：87.7%）。【限界】本研究は横断研究であり、今後、患者の診断が双極性障害から双極性障害に変更される可能性がある。【結論】TEMPS-A短縮版で評価される循環気質と不安気質は

双極性障害と双極性障害の診断の鑑別因子であり、双極性障害の早期診断において補助的役割を果たす可能性が示唆された。

Regular Article

Source decomposition of the frontocentral auditory steady-state gamma band response in schizophrenia patients and healthy subjects

D. Koshiyama*, M. Miyakoshi, Y. B. Joshi, M. Nakanishi, K. Tanaka-Koshiyama, J. Sprock and G. A. Light

*Department of Psychiatry, University of California San Diego, La Jolla, USA

統合失調症患者と健常者における前頭正中領域のガンマ帯域聴性定常反応の発生源推定

【目的】ガンマ帯域聴性定常反応は精神神経疾患の治療開発

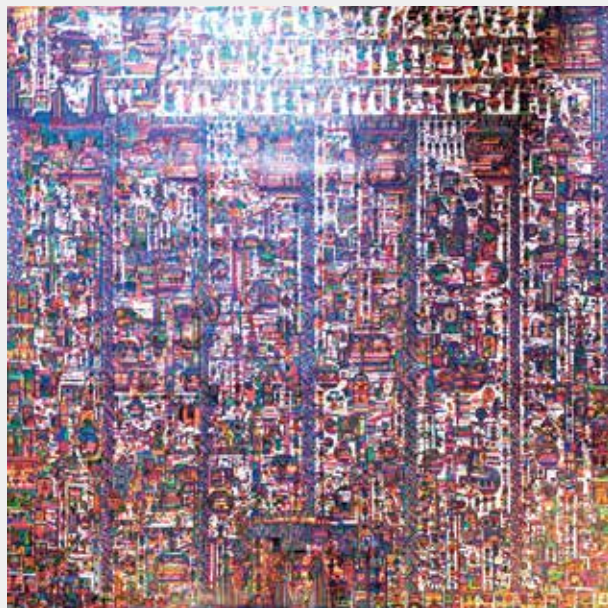
におけるトランスレーショナルバイオマーカーとして注目されている神経生理学的指標である。ガンマ帯域聴性定常反応は前頭側頭領域において相互連絡をする神経ネットワークによって生成される。一方で、脳波を使ったヒトのガンマ帯域聴性定常反応の研究の多くは前頭正中の頭皮電極 Fz の単一電極にのみ注目している。Fz ではガンマ帯域聴性定常反応は最大になる傾向にあり、この部位での反応が統合失調症患者で減少することも繰り返し報告されている。しかしながら、前臨床試験と臨床研究の橋渡しをするのに必要なステップである Fz に対する電位源の寄与度を調べた研究はこれまでになかった。【方法】独立した皮質の電位源の寄与を逆投影する新しい方法を適用して、432 名の統合失調症患者と 294 名の健常者においてガンマ帯域聴性定常反応の電位源および Fz へのその電位源の寄与率を評

価した。【結果】ガンマ帯域聴性定常反応の電位源から Fz への寄与は、両群において前頭前野眼窩部、両側の上/中/下側頭回、両側の中前頭回、後部帯状回でみられた。予想に反して、両群で Fz のガンマ帯域聴性定常反応の電位源からの寄与はおおむね同様であった。先行研究と同様に、統合失調症患者において Fz のガンマ帯域聴性定常反応は低下していたが、Fz に寄与する個々の電位源においては両群間で差はみられなかった。【結論】多数の独立した電位源におけるわずかな群間差が合計されて頭皮電極 Fz における群間差となると考えられる。今後のトランスレーショナル研究で分離できるあるいはできないバイオマーカーを測定するために、単一の頭皮電極へのそれぞれの電位源の寄与を測定する方法論は有用となるだろう。

与那覇は1979年生まれ。大学4年生の頃に精神疾患を発症。生き霊が自分にとりついていてることを感じ、その声が聴こえるようになる(なお、当初の生き霊は中年以上の男性であったが、近年では、一種の守護霊として、若い女性の存在を感じている)。2013年9月、知人の作品をみたことをきっかけに、美術展に応募するようになる。制作自体は、その数年前から行っていたが、本人も家族もそれが「作品」になるのだと認識してはいなかった。

制作当初は白い紙に黒いペンで制作をしていたが、やがて親のアドバイスをうけて色を使うようになる。マンガの影響下、イメージと文字が共存しているが、その量が膨大である。図像の様式はさまざまで、たとえばひとがたも、マンガのように描かれているものもあれば南米の民俗彫刻を思わせるようなものもある。文字は、「応募したろー」という自らの思いを吐露するものもあれば、「第二次世界大戦」や「第一次世界宇宙大戦」など、未来=仮想を含めた歴史に属するものもある。この脈絡のなさは、彼が自分の耳に聴こえてきたものや心のうちに上がってきた思いを自動筆記した結果だと言ってよいが、興味深いのは、そうした膨大な量の言葉とイメージを受け止める構図が彼の作品には具わっていることである。その構図は曼荼羅にも似ているが、ある図像の線が別の図像の線へと連続していくあり方などは与那覇独自のものである。膨大な情報量を支えるだけの構成を自ら生み出したと言えるだろう。

(保坂健二郎, 滋賀県立美術館)



タイトル：タイトル未定

作者：与那覇 俊 (YONAHA Shun) 制作年：2020年

素材：紙, 油性ペン, マジック サイズ：1987×1987 mm